

機関番号：34535

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009 ～2011

課題番号：21890291

研究課題名（和文） 災害看護コンピテンシーの抽出と構造化

研究課題名（英文） Extraction and construction on disaster nursing competencies.

研究代表者

畑 吉節未 (HATA KIYOMI)

神戸常盤大学・保健科学部・看護学科・講師

研究者番号：10530305

研究成果の概要（和文）：阪神・淡路大震災（1995年）以降、被災地で活動した看護師及び看護師とともに活動した医師等の医療職からインタビューを行い、災害時に成果を上げた行動と、直面した困難を具体的な行動レベルで収集した。収集した行動からコンピテンシー・ディクショナリー“災害看護行動データベース”を構築した。データベースは、災害看護実践行動の語りと語りを質的に分析し抽出したカテゴリで構成した。また、災害看護コンピテンシーの構造化を図るため、個別性と共通性について検討を行い、図化し可視化した。

研究成果の概要（英文）：Nurses, doctors and other health care professionals, who engaged in health care practice with nurses in disaster areas since Hanshin-Awaji Earthquake in 1995, were interviewed about nurses' effective behaviors and practical difficulties at the level of concrete behavior. Competency dictionary named “Data-Base of Disaster Nursing Behavior” was constructed. It was consisted of both narratives of disaster nursing practices and themes extracted from narratives with qualitative analytic methods. To analyze construction of competencies of disaster nursing, characteristics and communalities of those themes were considered and visualized by mapping.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,030,000	309,000	1,339,000
2010年度	850,000	255,000	1,105,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,880,000	564,000	2,444,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：災害看護、コンピテンシー、構造化

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

頻発する災害に際して、医療者は被災した患者・療養者に対して適切なケアを提供することが求められている。看護者も医療者の一員として災害現場で高い実践能力を発揮するために、知識・技術・アビリティ・行動を統合した能力、即ち「災害看護コンピテンシー」を身につけることが不可欠である。そうした能力とその内容については、海外では、アメリカを中心に研究がなされ、被災者への健康状態のアセスメントや被災者とのコミュニケーション、他職種とのコラボレーション、トラウマへの対応 (Stanley 2005)、困難な状況下での倫理的判断、受容性、創造性、創意工夫 (Davis ら 2003) 等の分析が進められているものの、未だ統一的な災害看護コンピテンシーを共有するには至っていなかった (Stanley 2005)。

国内では阪神・淡路大震災 (1995 年) を契機に災害看護のプログラム開発やカリキュラムの構築についての研究 (小原・長谷部 2004, 山本ら 2005) がなされてきたが、それらの中でコンピテンシーに着目するものはなかった。なお、海外でのコンピテンシー研究の成果を導入・適用しようとする試みがあるが、具体的な災害実践をもとに理論的背景、抽出プロセスが明らかされておらず論文もないために、現在でも適切な教育プログラム開発に生かせていない。

また、災害時には、異なる職種とチームを組んで相互に交流・支援し合いながら活動する必要がある、医療専門職種間で相互に発揮できる能力を理解・共有することは重要である。コンピテンシーにはこのような機能もあり (Rychen & Salganik 2003)、研究を通してとらえることの意義は大きく、現在でもこのことには変わりはない。

研究者は、阪神・淡路大震災 (1995 年) だけでなく、兵庫を襲った台風 23 号風水害 (2004 年) の被災地で、災害時に看護師が質の高い適切なケアを行う中で高い成果を生み出す特徴的な行動特性を示していることを目のあたりにした。そうした行動特性を今後の災害看護実践のための教訓として、オーラルヒストリーとして記録することと、その中から災害時に看護職に必要な能力(コンピテンシー)を明らかにすることが必要であった。

研究開始当初は、阪神・淡路大震災から 15 年が経過しようとしていた。月日の経過に伴って退職する者も増加しているなかで、阪神・淡路大震災以降の災害もあわせて、災害体験から学ぶ、教訓を語り継ぐ必要があることが認識されいながらも、そうしたオーラルヒストリーの蓄積は十分なものではなかった。また、災害看護学も未だ構築されていないと指摘されている状況であった。

実際、阪神・淡路大震災の被災地で看護実践を行った看護者からは「15 年を経過して初めて当時

の自分の行動を振り返ることができた」「災害看護にとって何が大切か分かってきた」「当時の体験を是非語りたい」「教訓として看護実践に生かして欲しい」などの声を頂戴した。15 年を経過した今、インタビューに応じてくれた研究協力者の中には退職を間近にした看護管理者も多く、災害看護研究において二度とない貴重な時期に行われたものと言える。この研究の成果をまとめている際に、未曾有の規模で東日本大震災が生じた。こうした環境下で、今後さらに災害看護実践と教育の必要性が高まることが予測される。本研究の成果が生かせることを期待するとともに、災害看護学構築の一助になりたいと考えている。

2. 研究の目的

この研究の目的は、災害サイクルの中でも急性期を中心に亜急性期にも焦点をあて、災害発生時の臨床現場で、高い看護実践能力を示した看護行動と困難な状況下で残った課題を収集・分析することで、災害看護に必要なコンピテンシーを抽出し、構造化することである。

3. 研究の方法

災害看護行動の語りをオーラルヒストリーとして収集・記録し、データベースを構築する。

(1) 災害看護を体験した看護師、医師、薬剤師、PT/OT、心理療法士への行動結果面接 (Behavioral Event Interview, McClelland 1973) を行い、看護者及び他職種からの災害時の看護行動についての語りをオーラルヒストリーとして収集し、データベースに蓄積する。対象者は、自然災害と大規模交通災害において災害看護実践を行った看護師と、医療職を中心にした他職種 (医師・薬剤師・PT/OT・心理療法士各 5 名) で計 50 名程度を想定した。

(2) データベースに蓄積した語りを現象学的アプローチ (Benner 1978) により質的分析を行い、災害看護のコンピテンシーの抽出を図る。

① 大規模なデータの分析を伴うため、テキスト・マイニング・ツールを活用してデータの構造化を試み、質的分析を効率的に進める。同時にデータベースに蓄積された逐語録データから災害時の看護行動の関連性を示唆するキーワードの抽出を試み、質的分析に生かす。

② テキスト・マイニング・ツールによって得られた分析結果を援用しながら、質的分析で得られたカテゴリーから、災害看護実践行動の関連性 (共通性個別性) を分析し、災害看護コンピテンシーの内容および構造を明らかにする。その結果得られた成果を可視化するためにマッピングする。

4. 研究成果

(1) 災害看護実践行動データベースの構築

災害時の看護実践行動を蓄積し、収集・分析するために、阪神・淡路大震災(1995年)以降に発生した災害の被災地で災害看護の実践に携わった看護師と、看護師とともに活動した医療職からの語りをもとに災害看護実践行動データベースを構築した。

対象とした災害は、地震及び風水害の自然災害と大規模交通災害である。地震では阪神・淡路大震災(1995年)、新潟県中越地震(2004年)、新潟県中越沖地震(2007年)、風水害では平成16年台風第23号災害(2004年)、平成16年福井豪雨災害(2004年)、平成21年台風9号災害(2009年)、大規模交通災害ではJR福知山線脱線事故(2007年)である。

データベースには、看護師と医師等の医療者などの研究協力者56名から収集し、逐語録にした語りを蓄積した。災害看護実践及び看護師の行動について語った者の内訳は、看護職40名(看護管理者14名、病棟・外来看護師12名、支援看護師14名)と医療者16名(医師8名、PT・OT2名、薬剤師3名、臨床検査技師1名、臨床心理士1名、事務1名)である。

対象者となった看護師は当時、平均300床程度の比較的規模の大きな病院と大学に所属しており、中堅からベテランの看護師としての職責を担っていた。大学教員は災害看護の研究者であった。医療者はそうした看護師とともに災害医療に携わった者である。

語りは、個別に約1時間のインタビューを行うことで収集し、研究協力者の同意のもとに記録・作成した逐語録であり、個人が特定できないようにプライバシーの保護に細心の注意を払った。

災害看護実践行動データベースは、そうした貴重な語りと、質的に分析することで得られたカテゴリとサブカテゴリ、及び逐語録の内容とを関連づけて構築したデータベースである。

研究対象の中心となる看護師は、インタビューの中で、災害という厳しい条件下で看護師としての使命を果たせた達成感や、災害現場で医療に関わる中で経験した困難や感じた戸惑いなど、災害経験から月日が経過しているにも関わらず、時には言葉を詰ませながらも終始真剣な面持ちで自らの実践行動を中心に語ってくれた。語りは、具体的で臨場感溢れるものであり、担った役割ごとに特徴が見られ、災害看護実践行動を蓄積した、信頼性の高い貴重なデータベースとなった。

(2) 災害看護実践行動の役割ごとの特性検討

①看護管理者の語りから

災害看護実践行動データベースをもとに、蓄積した行動を役割ごとに分類し、特性を検討したところ、看護管理者からは「災害時に対応出来る機能をもった病院に変える」、「応援によるスタッフや物資の確保」等の11カテゴリが得

られた。

これらのカテゴリからは、被災直後に病院を機能させるよう施設とスタッフ、物資を整え、患者を守るための避難や転院を決断・実行するなど、突然襲った災害に立ち向う姿が見て取れた。安心して働く環境の確保、心のケアなどの急性期から亜急性期をスタッフとともに乗り越えようとする姿勢や、病院を訪れる患者・傷病者と死者や遺族への配慮、活動範囲を病院から避難所・地域に広げ、ケアを提供しようとする姿が窺えた。

また、災害の中で経験したことを将来の備えにつなげようとするなど、看護管理者が持つ高い能力を発揮して懸命に役割を果たそうとする姿が推察された。その反面、セルフケアへの対応が課題として残った。

②病棟・外来看護師の語りから

病棟・外来看護師からは「看護師としての自覚、積極的な行動」、「入院・通院患者への対応」等の11カテゴリが得られた。病棟・外来看護師は、被災直後から病院に駆けつけ、混乱する状況下でも自発的に行動し、医師とチームを組み、患者を最優先に考え行動する姿が見て取れた。

病院を訪れる傷病者にも、資器材が不足しても工夫して看護を提供し、死者と遺族に配慮する行動には、災害時でもきめ細かな看護ケアを継続しようとする姿が窺えた。また、安心して働ける環境の確保に努め、スタッフ同士で心のケアを行うなど、チームで働き自らの役割も全うする姿が推察された。働く場も避難所や在宅など医療ニーズの高まりに対応して広がり、多様な支援者と働くなど柔軟に対応することが求められた。

③支援看護師の語りから

支援看護師からは「避難所と在宅で医療ニーズ・看護ケアの必要な被災者の把握」、「避難所のケアの体制を整える」等の12カテゴリが得られた。支援看護師は、多くの支援看護師が病院よりも避難所や在宅などの場で活動していることが窺えた。看護師は場所に応じて体制を整えながら、被災者の医療ニーズを引き出し、適切なケアを提供し、必要に応じて医療につなぐなど、災害ごとに異なる状況に対応し、被災者の力も使いながら看護ケアを提供する姿が窺えた。また、災害現場では、黒タグの傷病者への介入など死者のケア、重症者のケアなど、緊迫した状況下でも患者へのケアを適切に提供する姿が見て取れた。

(3) 看護実践行動の構造化

災害看護実践行動データベースをもとに、蓄積した行動を役割ごとに分類し、特性を検討したところ、看護管理者からは「災害時に対応出来る機能をもった病院に変える」、「応援によるスタッフや物資の確保」等の11カテゴリが得られた。

役割間に共通の災害看護実践行動を看護管理者、病棟・外来看護師、支援看護師に着目して見ると、全ての役割に共通するものでは「死者と遺族へのケア」、「スタッフの心のケア」等が、2つの役割に共通するものとして、例えば、看護管理者と病棟・外来看護師では「傷病者へのケア」、「働く環境の整備」等がみられた。

これらの項目内容を全ての役割に共通する「死者と遺族へのケア」を例に見ると、看護管理者はベテラン職員を担当させるなど職員配置を工夫し、病棟・外来看護師では死者と遺族への直接的なケア、家族のために死者の最後を記録して伝えたり、支援看護師は災害現場でトリアージにおける黒タグの傷病者に介入する等の行動に特性が見られた。

「スタッフの心のケア」では、看護管理者はスタッフに定期的・継続的にケアを提供するとともに、辞めた職員をも対象にして心のケアを提供していた。病棟・外来看護師は仲間同士で感情表出する機会を作り、安心して働けるように支え合っている。支援看護師はセルフコントロールにより看護者同士でケアし合うだけでなく、被災地の看護師をケアするなどの行動を示していた。

他職種の視点から見た災害看護実践行動については、とりわけ黒タグ患者への介入など災害現場でのケアや避難所での活動時に被災者の心に染み入るように巧みなコミュニケーション能力を発揮しながら被災者-看護師関係を上手く構築し、医療ケアに繋げるなど高い成果を上げたことを指摘した。

これらを役割ごとにマッピングすることで共通性の中でも、役割ごとに特性が見られる。いわゆるラダーの存在が窺える要素が見えてきた。

(4) 災害看護コンピテンシーの抽出と構造化

災害時特有の疾患や診断・治療のための技術を発揮することはもとより、発災直後から病院に駆けつけ患者や被災者のために献身的に働く姿には看護職の【使命感】が見受けられる。

また、病院機能を持続させるためにゾーニングを再編、適材適所の職員配置を行う看護管理者の行動からは【構想力】・【計画力】や【判断力】を抽出することができた。

物品が不足する中で工夫して患者を治療する看護師の行動からは【創造力】や【発想力】、【実践力】が窺える。同じ役割や異なる役割同士、職種を超えて協力して働く姿からは【チームとの協働力】が見て取れる。

混乱する状況下でも、遺体安置所に精神科の医師とベテランの看護師を配置し、家族の死に直面する残された家族の心に寄り添うケアを提供する姿からは【共感力】が窺える。

通院患者の治療継続を考えて、他病院に委ねて医療の継続を図ろうとする行動等にみられる看護管理者の【判断力】、勤務シフトの再編を部下に権限移譲すること等に【危機的状況下での

リーダーシップ】のあり方等が見えている。

避難所で血圧を測りながら医療ニーズを把握する姿や地元の人に馴染んだ言葉で被災者の間に入って行く姿には【コミュニケーション力】の大切さが窺える。

この他にも、看護実践行動の様々な場面で多様な実践能力を発揮している姿が明らかになってきた。こうした力の中には ICN による災害看護コンピテンシーのフレームワークが示す力と共通するものが見受けられた。

こうして災害看護実践行動から浮かび上がった災害看護コンピテンシーをもとにコンピテンシー・ベースドの教育プログラムの開発に繋げる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 畑吉節未、松田宣子、災害看護実践行動をもとにした災害看護教育プログラム開発のための基礎的研究—災害看護実践経験を持つ看護者の語りの分析—、日本災害看護学会誌、査読有 (原著論文)、13 巻 2 号、2011、印刷中
- ② 畑吉節未、災害看護経験を持つ看護管理者が看護基礎教育に求めるもの、日本看護学会論文集—看護管理—、査読有、第 41 号、2011、pp.148-151、
- ③ 畑吉節未、被災体験を持つ看護師が看護基礎教育に求めるもの—阪神・淡路大震災を経験した看護師の語りから、日本看護学会論文集—看護教育—、査読有、第 41 号、2011、pp.79-82、
- ④ 畑吉節未、災害看護経験を持つ看護管理者がとらえた看護実践上の課題の検討、日本看護学会論文集—看護管理—、査読有 (優秀論文賞)、第 40 号、2010、pp.3-5、

[学会発表] (計 6 件)

- ① 畑吉節未、災害看護経験を持つ看護管理者が看護基礎教育に求めるもの、第 41 回日本看護学会—看護管理—、2010、10.26、朱鷺メッセ・新潟市、
- ② 畑吉節未、災害時に高い成果をあげた看護行動の検討—阪神淡路大震災を経験した看護師の語りから—、第 12 回日本災害学会、2010.8.29、福井市フェニックスプラザ・福井市、
- ③ 畑吉節未、被災体験を持つ看護師が看護基礎教育に求めるもの—阪神淡路大震災を経験した看護師の語りから—、第 41 回日本看護学会—看護教育—、2010.8.19、

- アルカス SASEBO・佐世保市、
- ④ 畑吉節未、石川雄一、Qualitative analysis of nurse-directors' effective behaviors in natural disasters、世界災害看護学会
(The 1st Research Conference of World Society of Disaster Nursing)、2010.1.10、神戸国際会議場・神戸市、
 - ⑤ 畑吉節未、災害時に活動した看護管理者がとらえた課題の検討、第40回日本看護学会－看護管理－、2009.10.26、大阪国際会議場・大阪府、
 - ⑥ 畑吉節未、災害看護コンピテンシーの検討(初報)－被災時に活動した看護管理職の行動結果面接から－、第11回日本災害看護学会年次大会、2009.8.29、神戸ポートピアホテル・神戸市、

6. 研究組織

(1) 研究代表者

畑吉節未 (HATA KIYOMI)
神戸常盤大学・保健科学部・講師
研究者番号：10530305